

日本文法概論

吉岡郷甫

單語を分類して、其の法則を説明したのは、富士谷成章が始である。其の前には手爾乎波だとか、假名遣だとかいふやうな、文法の或部面に就いて研究したものはあるが、單語全體の法則を取纏めて説明したものはない。然るに成章は單語を名、裝、挿頭、脚結の四つに分けて説明した。がさし抄及脚結抄に其の一端が見られる。成章に次いで鈴木胤は言語四種論に於て、國語を體の詞、てにをは、形狀の詞、作用の詞の四つに分けた。又東條義門は用言（活く詞）、體言（活かぬ詞）の二つに分け、てにをはは之を活くものと活かぬものとに依て、一は用言に、一は體言に分類させた。かくて單語の分類は稍整つて來たが、富樫廣蔭が出るに及んで、一層精密になつて來た。即ち廣蔭は詞の玉橋、詞の玉襷等に於て、單語を言、詞、辭の三つに分けた。言は體言、詞は用言の事である。さうして、詞は之を説動用詞、説容用詞の二つに分け、辭は之を動辭、靜辭の二つに分けた。尙多少の不備はないが、これ迄の分類の中では一番進歩したもので、廣く其の後の國語學界を牛耳つた。堀秀成の語學階梯、鈴木重胤の語學捷徑、權田直助の語學自在など、いづれも此の分類を承繼いで居るのである。

其の間西洋の語學の研究せられると共に、之を國語に應用する學者が出て來た。鶴峯戊申の語學新書の如きはそれで、和蘭陀の文法を模範として、單語を實體言、虛體言、代名言、連體言、活用言、形容言、接續言、指示言、感動言の九つに分けた。併し向ふの文法も齟齬せず、國語も十分研究しなかつたと見えて、誤謬と矛盾とは至るとこ

ろに發見される。其の後に現れた田中義廉の小學日本文典は、西洋文典の分類法を稍整つた形に於て應用し、中根淑の日本文典は更に之に一步を進めた。即ち日本文典は單語を名詞、代名詞、形容詞、動詞、副詞、後詞、接續詞、感歎詞の八つに分けて研究した。此の中後詞といふのは、活かなくてにをはを總稱したものである。併し國語を全く西洋文典の範疇に合はせて説くことは到底不可能であつた。そこで一方には西洋の文法の法式に據り乍らも、他方では國語の本性に背かないやうに力めた學者があらはれた。それは帝國大學の名譽教授チャン・バン(Chamberlain)氏で、氏は明治二十年文部省の命を受けて日本小文典といふ本を撰んだが、其の本は單語を働く辭と働かざる辭に大別し、働く辭を形容詞、動詞の二つ、働かざる辭を實名詞、代名詞、副詞、接續詞、數詞、間投詞、關係詞の七つに分けた。此の分類に於て働くてにをは之を動詞に付け、働かぬものは之を關係詞といふ目に收めた。又從來形容詞の活用形を分離して或は副詞と稱し、或は形容詞と稱しなどしてゐたのを一つの詞として形容詞といふ目に收めた。數詞も一つの詞として立てた。其の他總べての點に於て、きちんと條理の立つてゐるところは、我が國に於て稍整頓した文典の現れた最初のものといつて宜しいのである。

抑ゝ我が國の言語は西洋の言語とは、語族が違つてゐて、彼の屈折語 (inflective) に屬するに對し、我は漆着語 (agglutinative) に屬するので、文法の齟齬してゐる點が甚だ少くない。然るに我が文法を説明するに、一も二もなく彼の分類法を用ゐようとすると、非常な無理を作らなければならぬ。例へば國語では名詞を表すに、「耳が」「耳の」「耳に」「耳を」などと、別に或てにをはを付けて表すのに、獨逸語では das Ohr, des Ohres, dem Ohre, das Ohr などと語尾の變化で表はす。それで西法の文法の法式に合はせて説かうとすると、「が」「の」「に」「を」をてにをはから分離して、之を名詞の語尾として説かなければならぬ。又「高く・高し・高き・高けれ」は一つの形容詞の活用形であるが、西洋の文法の法式に當てはめようとすると、之を簡々に分離しなければならぬ。即ち「高く」が副詞

で、「高き」が形容詞、「高し・高けれ」は敘述に用ゐられてゐるから、動詞とでも言はなければならぬ。古い西洋式の日本文法は多くはかういふ風に出来てゐるから、無理な點が甚だ多い。之に對して我が國語者の分類は他の影響を受けずに發達したものであるから、國語の本性には合つてゐる。けれども本が主に古文や古歌を説くために起つたものであるから、日本語の全般に通じた記述には乏しく、隨つて其の分類に足らぬものがある。それで在來の國學者が用ゐ來つたものを其の儘承繼ぐわけにも行かぬ。そこで我々は全體の分類は我が國學者の用ゐ來つたものを用ゐ、其の上の細かい別ちや不足な部分は、西洋の文法の分類を參酌して修補して行くのが、一番穩當であらうかと思ふのである。

國語を組成する單語は之を大別して語と辭との二つにする。語は單一な觀念を表すものを云ひ、辭はそのみでは單一な觀念を表はすことが出来ないで、語について種々の事情を表はしたり、又は他の語との關係を示したりするものを云ふ。即ち語は言語の大切な要素であつて、辭は其の運用を自在にする文法上の機能^{グラマチカル・ファンクシヨン}を有するものである。言葉を換へて云へば、語は西洋文法の所謂實語 (full word) であつて、辭は虚語 (empty word) である。例へば「今はむかし竹取のおきなといふものありけり。野山にまじりて、竹を取りつつ、よろづの事につかひけり。」といふ文章に於て、一を施したのが語で、施さないのが辭であるのである。

語には先づ實體 (substance) を表すもの又は實體として取扱ふことの出来るものがある。文の主部 (head word) となる。之に其の名稱をいふもの (名詞) と、其の名稱の代に用ゐられるもの (代名詞) と、其の數量又は順序をいふもの (數詞) との三通ある。此等は孰れも其の語尾を變化せぬ。總稱して體言といふ。

語には又實體の屬性 (attribute) を表すものがある。文の述部 (predicative word) となる。之に變化する屬性又は現象 (changing attribute or phenomena) を表すもの (動詞) と變化しな屬性 (permanent attribute) を表すもの

(形容詞)とがある。此等は何れも其の語尾を變化する。總稱して用言といふ。

語には又體言に屬しないで、其の語尾を變化しないものがある。之に他の語に對して副部 (adjunct word) の關係に立つもの (副詞) と、語句を接續するもの (接續詞) と、感動を表し、他の語に對して獨立の關係に立つもの (感動詞) との三通ある。總稱して準體言といふ。

次に辭には主として用言の敘述を助けるもの、(助動詞) と、他の語との關係を示すもの (助詞) とがある。助動詞は其の語尾を變化するから、之を用辭とも云ひ、助詞は其の語尾を變化しないから、之を體辭とも云ふ。

斯の如く單語は之を種々に分類することが出来るのであるが、或品類と他の品類との間には、いつも劃然たる境界線があるのではなくて、用ゐる様に依ては、甲の品類に屬する語が乙の品類に轉じ、乙の品類に屬する語が甲の品類に轉ずることがある。例へば「彩色」「裝束」といふ用言は、「顔はいろ／＼にさいしきたまひて」「いと清げにさうぞきて出でたまふを」のやうに用ゐると、用言になり、「切る」「霞む」といふ用言は、「霧」「霞」のやうに用ゐると、體言になるのである。

體 言 論

一 名 詞

物事の名稱をいふ語を名詞といふ。即ち我等の五感に感觸するものでも、理解力が知覺するものでも、其の名稱をいふものは總べて名詞である。

名詞は之を其の意味の上から有形名詞、無形名詞の二つに分つことが出来る。有形名詞といふのは實體を表す名詞 (人「赫夜姫」「家」「水」「群」など) で、無形名詞といふのは實體の屬性を表す名詞 (寒さ「暑さ」「思ひ」「喜

び」など) である。而して有形名詞を之は普通名詞、固有名詞の二つに、普通名詞は之を部類名詞、物質名詞の二つに、又部類名詞は之を集合名詞、單獨名詞の二つに分つことが出来る。此等の分類は西洋の國語では文法上大切な分類で、數、冠詞等の上に夫々特別な法則を生ずるのであるが、我が國語に於ては、更にさうした事が無い。隨つて茲にくだ／＼しく説明する必要もないのである。

日本の名詞には數 (number) 又は性 (gender) といふ形式がなす。「人々」「諸國」「娘ども」などの如く複數の意味を有する名詞はあるが、唯「人」「國」「娘」といつても複數を表すこともあるので、かくの如きものを數を表す形式であるとはいへない。又「を鹿、め鹿」「を竹、め竹」「息こ、息め」「世子、いも子」などの如く、男女の性を表す語もないではないが、一切の名詞を性に依て區別するといふことはないものであるから、文法上の性の形式はなすのである。

二 代 名 詞

有形名詞の代りに用ゐられる語を代名詞といふ。即ち有形名詞に與へられた指示語 (mark word) が代名詞で、名詞の反覆を避ける上に極めて必要なものである。例へば「淑景舎などわたり給ひて、御物語の序に「原子」がもとに、いとをかしげなる笙の笛こそあれ。故殿の得させ給へり。」とのたまふを、僧都の君の「笙の笛は隆圓にたうべ。隆圓がもとにめでたき琴待り。めでたき琴に代へさせたまへ」と申し給ふを」のやうに、一切代名詞を使はないと文が複雑になつて、事實が却て不明になるが、傍線を施した語句を「まろ」「それ」「おのれ」「それ」に代へると明に事實を表すことが出来るのである。

代名詞は自己を中心として其の物事と自分との空間的關係を指示するもので、「なんぢ」といふのは自分でないもの、「かしこ」といふのは、自分の立つてゐる「ここ」でないものを指示するのである。而して、其の指示するも

のが人であることを人代名詞と稱し、之を他の代名詞（指示代名詞と稱する）から區別する。又其の指示するものが、豫め定めてあるときには、之を定稱といひ、定めてないときには、之を不定稱といふ。

指示代名詞は其の指示するものが物事であるか、場所であるか、方角であるかに依て、それぞれ異同がある。而して其の定稱には近稱、中稱、遠稱の區別がある。近稱といふのは自分に近いもの、中稱といふのは相手に近いもの、遠稱といふのは自分又は相手のどちらにも遠く隔つたものを指すのである。

指示代名詞の根本的な形は左の通である

定	稱			不定稱
	近稱	中稱	遠稱	
こ	そ	か・あ	いづ	

「こ」「あしこ」「うづこ」「うづく」の如く「こ」を付けて場所を表し、「こち」「こなた」「そち」「そなた」「あち」「かなた」「あなた」「うづち」「うづかた」の如く、「ち」「なた（のかた）」を付けて、方角を表すに用ゐるのである。

次に人代名詞の根本的な形は左の通りである。

定	稱			不定稱
	自稱	對稱	他稱	
あ・わ	な	か・そこ	あ	た

「こは如何なる事ぞ」「そはいづこのぞ」「かはと見ながら」「あはと雲井に見し月の如く、古くは根本的な形のままでも用ゐたが、今は多く之に接尾辭を付けたものを用ゐる。即ち「これ」「それ」「かれ」「あれ」「いづれ」の如く、「れ」を付けて物事を表し、「ここ」「そこ」「かし」「わきもこがあをしぬがらし」「糸になるともわは解かじ」「なが鳴く里のあまたあれば」「こはかのわたりにて見えし人にあらずや」「そが持たりつらんはむかへん」「たにかもよらむ」の如く、古くは根本的な形のままでも用ゐたが、今は多くは之に「れ」といふ接尾辭を付けたものを用ゐる。他稱の「こ・これ」は近稱、「そ・それ」は中

稱、「か、かれ」「あ、あれ」は遠稱で、物事を表す指示代名詞から轉じたものである。

右の外に、名詞又は他の種類の代名詞から轉來した人代名詞は極めて多い。「予」「小生」「拙者」（自稱）「君」「足下」「貴殿」「閣下」「殿下」（對稱）は名詞から轉來したもの、「なむぢ（貴貴）」「そこ」「そなた」「あなた」「そち」などは指示代名詞を轉用するものである。此の中で「閣下」「殿下」などは元來對稱であるが、他稱にも轉用される。名詞又は指示代名詞から轉來したものは自分との空間的關係を指示する外に、自分と相手との身分關係をも表すものである。

三 數 詞

物事の數量又は順序を表す語を數詞といふ。數詞には我が國固有のものと、漢語から借用したものとの二通りある。我が國固有のもので、今日普通に用ゐられるものは殆ど「ひとつ」から「とを」までの數を示すに過ぎないのであるが、漢語から借用したものは、大小總べての數を表す。固有の數詞で十以上の數を示すものには、「はたち」「みそぢ」「よそぢ」「いそぢ」「むそぢ」「なゝそぢ」「やそぢ」「こゝのそぢ」「もゝ」「ち」「うほつ（五百）」「よろづ」など、色々あるが、其の用法が極めて不規則である。

「ひとつ」から「こゝのつ」までの「つ」は「箇」の意味を有つた接尾辭で、「つづ（十）」「つ」「はたち」「みそぢ」の「ち」「ぢ」などは孰れもこれと同語である。數詞の本體は此の「つ」を除いた部分であつて、「人ふたり」「帶よ筋」「平家なゝ棟」の如く、他の接尾辭を添へることもあるのである。此等の接尾辭は多く數詞の下に用ゐるので、其の表す物事の種類をも大凡に示すことになつてゐる。即ち「り」は人を示し、「筋」は細長いものを示し、「棟」は家を示す類である。此の如きものを助數詞（auxiliary numerals）といふ。助數詞といふ名はアストン（Aston）の名を付けたものである。

助數詞には「盃ひと組」「鴨ふた番」「小袖いつ襲」などのやうに、二つ以上のものが集合してゐることを示すものがある。これも其の用法に一定の習慣がある。

助動詞に對して専ら數の觀念を示すものを本數詞といふ。本數詞は助數詞と組み合つて數詞を作り、又は「ふた親」「なな草」「やそ島」のやうに名詞と組み合つて熟語の名詞を作る。此の場合には「みつ葉」「いつ緒」「や重雲」などのやうに助數詞と一緒に組合ふことがある。斯の如く用ゐた本數詞又は數詞は名詞を形容し、西洋の數形容詞に似た役目をする。併し西洋のは名詞から獨立し、我が國のは名詞と組合つて熟語を作るので違ふ。本數詞は同じ音を重ねたものに限つて、「古のなな賢き人ども」「この子らやかまけてをらむ」「もの官の人たち」のやうに獨立しても用ゐられた。又物を連續していふ時にも、「ひし」「ふう」「みず」「よう」の如く獨立して用ゐることがある。源氏物語の空蟬の卷にも「指を屈めて、とを、はた、みそ、よそなど數ふるさま」といふ例がある。

數詞の發達に就ては古來色々の説が見える。徂徠の南留別志には「ふたつはひとつの音の轉ざるなり。むつはひとつの轉ざるなり。やつはよつの轉ざるなり。いつつ、ななつはいづれ、なにいふことなり。ここのつはこころ、こたくのことなるべし。とをはつづの轉ざるなり。つづはここにいたりて算をつづめて一にするなり」とある。又堀秀成の琴舍漫錄にも略同様なことが述べてあるが、チャン・ハレンの日本口語法 (Handbook of colloquial Japanese) には更に一步を進めて、日本の數詞の偶數が其の奇數の母音變化から出來たことが述べてある。即ち *hito-huta, mi-mu, yo-ya, iku-to-yo* などはそれで、面白い着眼たるを失はぬ。

次に漢語から借用した數詞は「一」を聞いて十を知るなどの如く、其の儘で用ゐることもあるが、多くは固有の數詞と同じく、助數詞と一所に用ゐ、又は名詞と組み合つて用ゐる。例へば「馬十頭」「佛三體」「經一部」「屏風四帖」は助數詞と一所に用ゐたもの、「五戒」「七夜」「一軒家」「三本松」は名詞と組み合つて用ゐたものである。

物事の順序を表す數詞も多くは本數詞又は數詞と順序をいふ助數詞とが組合つて成立する。例へば「ふたつ目」「三軒目」「第三」「第四回」「一等」「第五號」などはそれである。併し時としては「一人」「三の口」「四の君」などの如く本數詞ばかりで順序を示すこともあり、「三十八年五月二十八日」の如く、本數詞が名詞の上に附いたばかりで順序を示すこともある。

用 言 論

一 動 詞

物事の變化する屬性を表す語を動詞といふ。變化する屬性を表す中で最も多いのは動作を表すものであるが、間々「影見ゆ」「音聞ゆ」などの如く、状態を表すものもある。又「あり」「居り」などの如く、存在を表すものもある。存在を表すものは變化する屬性を表すものとは言ひ難いけれども、尙ほ形態機能の上の類似から之を動詞に屬せしめるのである。

(一) 活用の種類

動詞は其の用法に依て語尾を變化する。之を活用と稱する。動詞の活用には正格のものに五種、變格のものに四種ある。正格のもの五種は左の通りである。

四段活用	咲	か	き	く	け
上二段活用	起	き	く	くる	くれ
下二段活用	明	け	く	くる	くれ
上一段活用	着	き	きる	きれ	きよ

下一段活用 蹴 け ける けれ けよ

此の表は便宜上動詞の語尾のカ行の音に變化するもののみを取つて、活用の形式を示したので、四段活用はサタハマラの行の音にも變化し、上二段活用はタハマヤラの行の音にも、下二段活用は十行中の孰れの行の音にも變化する。又上一段はアナハマワの行の音にも變化し、下一段活用は唯カ行の音のみに變化し、「蹴る」といふ語があるばかりである。

次に變格のもの四種は左の通りである。

カ行變格活用 來 こ き く くる くれ こよ

サ行變格活用 爲 せ し す する すれ せよ

ナ行變格活用 往 な に ぬ ぬる ぬれ ね

ラ行變格活用 有 ら り る れ

カ行變格活用に屬する動詞は「來」の一語ばかりであり、サ行變格活用、ナ行變格活用、ラ行變格活用に屬する動詞は「爲」「死ぬ」「有り」又はそれと熟合した語ばかりである。其の中カ行變格活用とサ行變格活用とは三段活用ともいふべく、ナ行變格活用とラ行變格活用とは一種の四段活用ともいふべきものである。殊にラ行變格活用は四段活用と其の語尾が似てゐるが、其の用法に異なるところがあるので、變格と稱するのである。

正格活用中の下一段活用及び變格活用に屬する動詞は各一語に過ぎず、上一段に屬するものも僅かに十數語に過ぎないが、他の活用に屬するものは孰れも相當に多い。其の中最も多いのは四段活用で、動詞總數の三分の二を占め、これに次ぐものは下二段活用で、これも可なり多い。上二段活用は此の二者に比べると、遙に少い。かくの如く、中古に於ては四段活用が最も優勢で、二段活用が之に次ぎ、一段活用は微々たるものであるが、其の勢力の消長は

時代に依て同じくない。即ち古くは四段活用の勢力が尙ほ盛であつたと見えて、中古の下二段活用の動詞で、古く四段活用であつた動詞が大分ある。山口栞や用言變格例などに指摘してあるものを擧げて見ても「避く」「寄す」「馳す」「隔つ」「給ふ」「祓ふ」「止む」「隠る」「離る」「觸る」「垂る」「忘る」「流る」「亂る」「別る」など色々ある。其の後下二段活用が稍活氣を帯びて來て、一時は同じ語が四段、下二段の兩様に活用した時代もあつたが、遂に四段と相並んで動詞の活用中の多數を占めるやうになつたのである。然るに近世に至つては此の形勢が一變して一段活用が俄かに頭角を現し、上二段、下二段で、上一段、下一段に活用するものがだん／＼多くなつて來た。動詞の活用といふものが、其の語生得のものではなく、時代に依て、遷り變るものであることは、之を見ても判るのである。

そこで茲に問題になるのは、動詞の九種の活用は最初から我が國語に備つてゐたものか又は其の中のどれかが根本で、他はそれから分れて出たものかといふことである。我が國の學者には、古く四段活用の勢力が盛であつたとから推して、四段活用に根本の活用と認めてゐる者が少くない。外人の研究者の意見も概ね之と一致してゐる。即ちホフマン(Hoffmann)は四段活用に根本(original)として、他は之に有爲得^{アリベツ}などの動詞の複合したものと考え、アストン(Aston)も矢張四段活用に根本として、二段活用に轉來(derivative)、一段活用に單綴(monosyllabic)の活用としてゐる。又チャンバレンは其の琉球語の研究に於て、日本の動詞が琉球語のそれと同じく根本の形の一つであること、其の根本の形の奈行變格活用であることを述べ、金澤庄三郎氏も朝鮮語の研究から導いて、日本の動詞の古活用に奈行變格活用としてゐるのである。

(二) 語尾の用法

動詞の各種の活用の語尾變化の數を調べて見ると、最も少いのは四通りに變化してゐるし、最も多いのは六通りに變化してゐる。そこで同一の場合に用ゐられる語尾變化を對照するために、一切の動詞の語尾を六通に書き列ね

て見ると、次の様な表が出来る。

活用	語尾	語幹					
		第一變化	第二變化	第三變化	第四變化	第五變化	第六變化
四段活用	咲	か	き	く	く	け	け
上二段活用	起	き	き	く	くる	くれ	きよ
下二段活用	明	け	き	く	くる	くれ	きよ
上一段活用	着	き	き	ける	ける	けれ	きよ
下一段活用	蹴	け	き	ける	ける	けれ	きよ
カ行變格活用	來	こ	き	く	くる	くれ	こよ
サ行變格活用	爲	せ	し	す	する	すれ	せよ
ナ行變格活用	死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
ラ行變格活用	有	ら	り	り	る	れ	れ

連用形は直に他の用言を連ねるばかりでなく、同趣の語句を続けることがある。例へば「朝に聞き、夕に死す」「水落ち、石出づ」などの類である。

連用形は之を云ひ据えて、名詞とすることがある。例へば「霧(遮る)」「網(編む)」「戀(捨)」「死」此の用法は後にはたん／＼狭くなつてゐるが、古くは稍自由であつたと見えて、「御執(号)」「御佩(刀)」「見(欲し)」「君が行きけ長になりぬ」などの如き、後にはない用例が見える。他の語と熟合して名詞となる場合は今も尙ほ少くない。例へば「追撃ち」「物怖ぢ」「面伏せ」「後見」「往來」「飢死」

第三變化は「花咲く」「幡幢に居り」などの如く、動作を其の儘に言ひ切ることが多い。此の變化を此の用法で代表させて終止形といふ。

終止形も其の儘之を名詞とすることがある。例へば「樽(垂る)」「陽炎」「雫」「そぼづ」「角力」「忍」「順」「融」これは四段活用の動詞に限る。

第四變化は「戀ふる頃」「燃ゆる思」の如く、名詞の上に置いて其の意義を限定することが多い。此の變化を此の用法で代表させて連體形といふ。

連體形の名詞の意義を限定してゐるものの中には、用ひ慣れて一つの熟語のやうになつてゐるものがある。例へば「垂木(横)」「鳴神」「釣瓮」「遣子」「刈萱」などはそれである。これも四段活用の動詞に限る。

第五變化は「月見ればもの悲し」「飲めども盡きず」などの如く、「ば」「ど」「ども」などの辭を付けて動作が現在既に行はれてゐることを表はすことが多い。此の變化を此の用法で代表させて已然形といふ。

第六變化は「香をだに残せ」「雲の通路吹き閉ぢよ」などの如く、其の儘で又は之に「よ」を付けて命令を表す。之を命令形といふ。

四段活用及び良行變格活用では、其の儘で命令を表し、他の活用では「よ」を付けて命令を表す。此の「よ」はもとは感動詞だと見えて、古くはそれを付けないものもある。例へば「刈薦の亂れば亂れ」「しだり柳の纏せ、わきも」「たしかに問ひ奉りてこ」又四段活用、良行變格活用にそれを付けたものもある。「いざたまへよ、をかしき繪」「あこは我が子にてあれよ」

動詞の各語尾變化の名稱は其の用法の著しい一つを取つて名付けたもので、各變化をこれを以て代表させようとするのである。次に参考のために、各家の各變化に與へた名稱を表示することにする。

動詞の第一變化は「まつとし聞かば今歸り來ん」「花も匂はず」の如く辭を付けて動作のまだ起らぬことを表すことが多い。此の變化を此の用法で代表させて未然形といふ。

第二變化は「花咲き出づ」「紅葉踏み分け鳴く」のやうに、他の用言を連ねて熟語を作ることがある。此の變化を此の用法で代表させて連用形といふ。

物事の靜止した屬性を表す語を形容詞といふ。靜止した屬性を表す中で、最も多いのは物事の有様を表すものであるが、「貴し」「賤し」の如く性質を表し、「嬉し」「悲し」の如く感情を表すものもある。西洋の形容詞は唯名詞の意義を限定するに過ぎないが、我が國の形容詞は語尾の活用することから文の中の位置に至るまで總べて動詞と異なる所はない。

形容詞も其の用法に依て其の語尾を變化する。之に久活用、志久活用の二種ある。各活用の第四變化は第一變化が「あれ」と熟合して出來た「かれ」の轉じたもので、奈良朝以前には無かつたも

(久活用) (志久活用)	活用	語尾	
		語幹	
新し	舊	變化第一	くく
		變化第二	し
		變化第三	き
けれ		變化第四	けれ

のである。即ち「こそ」の係も「衣こそ二重も善き」
「おのが妻こそとこめづらしき」などの如く、「き」
「しき」を以て結んでゐるのである。

〔志久活用〕
新し　く　○　き　けれ

形容詞の語根は「長む」「廣ぐ」「悲しむ」「嬉しむ」などの如く、或接尾辭が付いて動詞に轉じ、「深み」「苦しさ」の如く、「み」「さ」が付いて名詞になり、「ねむたげに」「樂しげに遊ぶ」の如く、「げに」が付いて副詞になり、「高山」「嬉し涙」「近寄る」「薄暗し」の如く他の語と熟合して熟語になることがある。

第一變化は「例の病起りていたく惱む」月を見ていみじく泣くなどの如く、他の用言を限定することが多い。此の變化を此の用法で代表させて副詞形といふ。副詞形は「任重く、道遠し」「松の色は青く、磯の浪は白し」の如く、同趣の語句を續けることがある。副詞形は又「寒くば内に入れ」「さびしくとも忍べ」の如く、辭の「ば」「と」を付けて物事の有様のまだ存在しないことを表すことがある。併しこれは「寒くあらば」「さびしくあり、とも」などの如く、「あり」といふ動詞を省いた形で、本をただせば前の未然形の用法と異なる所はないのである。

第○二○變○化○は「其の事の主さへにくし」「まいて節分はすさまじ」などの如く物事の有様を其の儘に言ひ切ることが多い。此の變化を此の用法で代表させて終止形といふ。

第三變化は「此の吹く風はよき^{カタ}方の風なり、あしき^{カタ}方の風にあらず」などの如く、名詞の上に置いて、其の意義を限定することが多い。此の變化を此の用法で代表させて連體形といふ。

第四變化は「まだ若ければをささからず」「嬉しけれども口にはえ言はず」の如く、「ほ」「ども」等の辭を付けて、物事の有様の既に存在してゐる事を表はす事が多い。此の變化を此の用法で代表させて既[○]然[○]形といふ。

(二) 形容動詞

形容詞と同じく物事の静止した屬性を表し、「かり」「なり」「たり」で終つてゐる語を形容動詞といふ。「かり」で終つてゐるものは、形容詞の副詞形が「有り」と熟合したものであり、「なり」で終つてゐるものは、「稀に」「妙に」「艶に」「溫厚に」の如く、有様を表す語の語根に「に」といふ接尾辭の付いたもの、「平らに」「清らかに」「和かに」「靜かに」「明らかに」「安らかに」「靱やかに」「若やかに」「健やかに」「和やかに」「危げに」「嬉しげに」の如く、同じ語根に「らに」「かに」「らかに」「やかに」「よかに」又は「げに」といふ接尾辭の付いたものが「有り」と熟合したものであり、「たり」で終つてゐるものは、「燦と」「漠と」「髣髴と」「劉唳と」「皎々と」「駸々と」「喟然と」「忽焉と」「莞爾と」「躍如と」「豁如と」「瞭若と」「凜乎と」の如く、有様を表す或種の漢語に「と」といふ接尾辭の付いたものが「有り」と熟合したものである。

形容動詞の活用及語尾の用法はラ行變格活用の動詞及び助動詞の「なり」「たり」と同じである。

準體言論

一副詞

用言又は他の副詞を限定する語を副詞といふ。例へば「靜かに歩む」「すこぶる遠し」などは用言を限定したのであり、「甚だ速やかに走る」「いと善く晴れたり」などは他の副詞を限定したのである。

副詞はかくの如く用言又は副詞を限定するのが普通であるけれども、又時としては「生きて還る者僅に三人」「稍右へ傾く」の如く體言を限定し、「恐らくは此の説當らざらん」「願はくは我が請を容れよ」の如く、他の語句を限定することがある。

二接續詞

語句又は文を接續する語を接續詞といふ。これに「日本及び英國」「今春京都に遊び、次いで奈良に趣きたり」の如く、物事を累加するもの、「雨又は風」「巡洋艦は戰艦と共に敵に當り、或は敵の港灣及び軍艦の情勢を探る」の如く、物事を選択するもの、「君も行け、然らば我も行かん」「犬は眠れる時も人の足音を聞けば直に目をさます。されば夜を守らしむるによし」の如く、上の條件と其の條件から起る順意の結果とを接續するもの、「古社寺等の昔の儘にて残れるは少し。然るに法隆寺は昔ながらの形を存せり」の如く、上の條件と其の條件から起る逆意の結果とを接續するものなどの種類がある。

三感動詞

凡て感動したときに發する語を感動詞といふ。感動詞は文から獨立して用ゐ、又其の先驅として現はれる。文の先驅として現はれるもの例を言へば、「あゝ、悲し」「あな、無慘や」「あはれ、旅人にこそあなれ」「いかに、さわやかに給へりや」「いざ、立寄りて見て行かん」「いで、我を人なとがめそ」「すは、一大事なるぞ」などの如きものである。

辭論

一、助動詞(用辭)

主として動詞に付いて、其の作用を助ける辭を助動詞といふ。助動詞は之を用辭といふことが多い。助動詞(用辭)の中には「花なり」「花の咲けるなり」「算參議たり」の如く、體言又は體言として用ゐたものに付き、「山の如し」「山の聳ゆる如し」「山の聳ゆるが如し」の如く、體言に「の」を伴つたもの、用言を根幹としたものを體言

としたもの又はこれに「が」を伴つたものに付くものがある。

助動詞(用辭)を式(form)、時(tense)、相(voice)、法(mood)其他に分ける。

(一) 式の助動詞

動作を正面から説くのを肯定式といひ、裏面から説いて打消するのを否定式といひ、總稱して式といふ。否定式を表すには、「鳥も鳴かず」「一日見されば千秋の思あり」の如く、動詞の否定形に「ず」「ざり」を付ける。「ず」は(未然形・副詞形)「ず(終止形)」(ぬ(連體形))「ね(已然形)」と活用し、「ざり」は良行變格活用の如く活用する。

(二) 時の助動詞

動作の時間的關係を表すのを時といふ。時には現に行はれるもの(現在時)、現在前に終つたもの(過去時)、現在以後に起るもの(未來時)の別がある。過去時、未來時を表すには動詞に助動詞を付ける。即ち次の通である。

動作の結果の現に存在してゐる時、又は現に進行してゐる時(存在時、進行時)を表すには、「月影水に映れり」「青葉の山も紅葉せり」の如く、四段活用の已然形及び佐行變格活用の未然形に「り」を付け、「みかきが原を霞こめたり」「山里に移らんと思ひたり」の如く、良行變格作用以外の連用形に「たり」を付ける。「り」「たり」は良行變格活用の如く活用する。

動作の正に終つた時(完了時)を表すには「とかく紛はしつゝ取隠しまひつ」「おびえまどひて御簾の中に入りぬ」などの如く、動詞の連用形に「つ」又は「ぬ」を付ける。但し「ぬ」は奈行變格活用に連ならぬ。「つ」は話手が事實を主觀的に直寫するが如き強い表彰法に用ゐる、「ぬ」は客觀的に説明するが如き弱い表彰法に用ゐる。「つ」は下二段活用の如く活用し、「ぬ」は奈行變格活用の如く活用する。

過去時を表すには、「糧盡きて草の根を食物としき」「なほの泊をおはんとて漕ぎ出でけり」の如く、動詞の連用

形に「き」「けり」を付ける。「き」は専ら過去を確めるに用ゐる、「けり」は過去を存在的に敘述するに用ゐる。「き」は「き(終止形)」「し(連體形)」「しか(已然形)」と活用し、「けり」は良行變格活用の如く活用する。

「き」は動詞の連用形に付くのを通則とするが、カ行變格活用、サ行變格活用に「き」「し」「しか」の活用が分れて、其の未然形にも付く異則がある。即ちカ行變格活用に「き」「し」「しか」の活用が分れて、其の未然形にも付く。サ行變格活用に「し」「しか」が付き、連用形には「き」が付き。

未來時を表すには、「雨止まむ」の如く、動詞の未然形に「む(ん)」を付ける。「む」は「む(終止形)」「む(連體形)」(め(已然形))と活用する。

時の助動詞は「りき」「りけり」「らむ」「たりき」「たりけり」「たらむ」「にき」「にけり」「なむ」「でき」「でけり」「てむ」の如く、相連續して、更に複雑な時の關係を表すことがある。

(三) 相の助動詞

主語が動作を起すのを起相といひ、他の者に動作を仕掛けられるのを所相といひ、他の者をして動作を仕掛けさせるのを役相と云ひ、總稱して相といふ。所相、役相を表すには動詞に助動詞を付ける。即ち次の通である。

所相を表すには、「犬、子供に打たる」「子、親に死なむ」「猫、下部に捨てたる」「人、馬に蹴らる」などの如く、四段活用、ナ行變格活用、ラ行變格活用に「る」、其の他の活用に「らる」を付ける。「る」「らる」は下二段活用の如く活用する。

所相と同じ形で「此の刀にても切らる」「ここよりも見らる」の如く、其の動作をするに堪へることを表し「幾千年を経たらむと思はるる老木」「故郷の事思ひ出でる」の如く、おのづから其の動作の起ることを表すことがある。前者を能相といひ、後者を勢相といふ。能相、勢相を來す仕方は所相と同じである。

役相を表すには「子供をして犬を打たす」「下部をして猫を捨てさす」の如く、四段活用、ナ行變格活用、ラ行變格活用の未然形に「す」、其の他の未然形に「さす」を付け、總べての動詞の未然形に「しむ」を付ける。「す」「さす」「しむ」は下二段活用の如く活用する。

所相の助動詞は「殿下大學に臨まる」「元を嘉永と改めらる」の如く、敬意を表すことがある。役相の助動詞も敬意を表すことがあるが、下に「たまふ」又は敬意を表す「らる」を續けることが多い。例へば「天顏麗しく笑ませたまふ」「侍従を差遣せさせらる」。

(四) 法の助動詞

動作を客觀的な事實として表すのを事實法 (fact mood) 又は直說法 (indicative mood) と云ひ、主觀的な事實として假想するのを思想法 (thought mood) と云ひ、他に對する希求を表すのを命令法 (imperative mood) と云ふ。思想法を表すには動詞に用辭を付ける。例へば「思はむ子を法師になしたらむこそは悲しけれ」「いかでさる事のあらむ」「春來ることを誰か知らまし」の如く、動詞の未然形に「む」「まし」を付け、「雨降るべし」「まだ世に在らばいかなる世にかさすらふらむ」の如く、動詞の終止形に「べし」「らむ」を付ける。「べし」は又「まことに忠臣の鑑といふべし」「軍人は禮儀を正しくすべし」の如く、可能適當の意を表し、又は義務命令の意を表すに用ゐることがある。「む」「らむ」は未來時の助動詞の「む」と同じく活用し、「まし」は「まし(終止形)」「まし(連體形)」「ましか(已然形)」と活用し、又「べし」は形容詞の如く活用する。

「まし」には「世の中に絶えて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし」の如く「せ」といふ未然形にも比すべき活用形がある。「ましか」と同じく「ば」が付いて、假想の條件を表し、下に假想の動作を以て之に應ずる。

「遠くは行かじ」「馬にも乗るまじ」の如く、動詞の未然形に「じ」、終止形に「まじ」が付けば否定の法を表し、

「如何なる心にかありけむ」の如く、連用形に「けむ」が付けば、過去時の法を表す。「じ」は活用せず、「まじ」は形容詞の如く活用し、「けむ」は未來時の助動詞の「む」の如く活用する。

思想法は客觀界に關係なく、主觀即ち心の裡で假想するのであるが、同じ心の働乍ら、客觀界に於ける現象の確否に就て種々の程度を表すのを推量といふ。即ち推量は現在の客觀界に多少の根據がなければ表せないのである。推量を表すには「此の川にもみぢば流る、おく山の雪解の水ぞ今まさるらし」「そこまとはおちたる所に待るめり」の如く、動詞の終止形に「らし」「めり」を付ける。「らし」は見聞する事柄から聯想して動作を推量し、「めり」は動作を確説すべきところを躊躇するに用ゐる。「らし」は「らしく(副詞形)」「らし(終止形)」「らしき(連體形)」と活用し、「めり」は良行變格活用の如く活用する。但し未然形を缺く。

(五) 其の他の助動詞

「機取の心は神の御心なり」「はやても龍の吹かするなり」「君君たらすとも臣臣たらざるべからず」の如く體言、又は體言として用ゐられたものに「なり」「たり」が付けば、事物に就いて解説し又は斷定することを表す。「なり」「たり」は良行變格活用の如く活用する。

「我も行きたし」の如く、動詞の連用形に「たし」が付けば、動作の希望を表す。「たし」は形容詞の如く活用する。

「なほ同じ所に在ること昨日の如し」「そこらの黄金たまひて身をかへたる如くなりけり」「秋の月を見るに曉の雲にあへるが如し」の如く、體言に「の」を伴つたもの、用言を根帶としたものを體言としたもの又は之に「が」を伴つたものに「如し」が付けば、事物を之に類似した事物と比べることを表す。「如し」は形容詞の如く活用する。但し已然形を缺く。

(六) 助動詞相互の連續

助動詞が相互に連續するには習慣上一定の順序があつて、隨意に上下を轉置することは出来ぬ。其の順序は(1)役相(2)所相(3)尊敬(4)否定式(5)存在進行完了時(6)普通の時(7)指定(8)法で、芳賀博士がかく斷定せられたものである。併し其の間に「ざり」「べかり」の如き、「有り」を含んだものが來るときには、此の順序を紊すことがある。助動詞が他の助動詞と連續する仕方は、それが動詞に續く場合と同様で、動詞の或變化を受ける助動詞は他の助動詞を受けるときにも、同じ變化に續くものと考へて間違はない。

二 助 詞 (體 辭)

他の語との關係を表し、語勢を添へ、其の他種々の事情を示す辭を助詞といふ。助詞は之を體辭と稱することが多い。

助詞(體辭)には格を示す助詞、拔萃的助詞、接續的助詞法を示す助詞の五種類がある。

(一) 格を示す助詞

格を示す助詞には「の」「が」「つ」「に」「を」「と」「へ」「より」「まで」などが之に屬する。體言又は體言として用ゐたものに付く。

「の」「が」「つ」は「兄の家」「故郷の母」「梅の家」「沖つ浪」などの如く他に從屬することを表し(領格、終飾格)、「の」「が」は「音のさやけさ」「花の咲く頃」「聞くがたのしさ」の如く、主語を表すことがある(主格)。「に」は「落花雪に似たり」「屋根に立つ」「中古に存す」の如く、動作の歸着する點を示す(補格、副格)。時に「財貨に心惑ふ」「狩に行く」の如く、原因目的を表し、「鬼に金棒」「竹に雀、柳に燕」の如く、添加、配合を表す。「を」は「二羽の雉を獲たり」の如く、動作の對象物を示し(客格)、又「家を出づ」「川を下る」の如く、動作の起發又は進行する

場所を示す。「と」は「木石となる」「友と遊ぶ」の如く、動作の歸着關與するものを示す(補格、與格)。又「長春を新京と改む」の如く、事物を指定し、「月と花とを賞す」の如く、並列するに用ゐる。「へ」は「前へ進む」の如く、動作の進行する目標を示す。「より」は動作の起發する事物を示し、「まで」は其の終局する事物を示す。「より」は「山より高し」の如く、比較の標準を示すことがある。

(二) 拔萃的助詞

拔萃的助詞には「は」「も」「ぞ」「なん」「こそ」「し」「だに」「すら」「さへ」「のみ」「ばかり」などが之に屬する。種々の語又は辭を伴つた語に付く。

「は」は「日本は神國なり」「我には許せ、敷島の道」の如く、事物を拔萃するに用ゐる。「も」は「山も川も見え分かず」「嬉しくも悲しくもなし」の如く、拔萃して並列するに用ゐる。「千圓も費す」「辛くも終へたり」の如く、並列しないで、深い意味を籠めて云ふこともある。「ぞ」「なん」「こそ」は「風ぞ強き」「めなれぬ事のみぞ多かる」「富士の山なん殊に古より名を得たる」「月をなん賞づる」「花の中にも櫻こそめでたけれ」「さらにこそ信じられぬ」の如く、事物を拔萃してエンフアサイズするに用ゐる。其の中「ぞ」と「なん」とは調子が稍と緩く、「こそ」は急である。共に下の動詞に影響して係結の關係を起す。「し」は「君し思へば、我もたのまむ」「范蠡なきにしもあらず」の如く、尙拔萃してエンフアサイズするに用ゐる。但し係結の關係を起さぬ。「だに」「すら」は「雨だに降らずば行くべし」「乾きだにせよ」「犬すら恩を知る」「亂世にてすら然り」の如く、軽い事物を拔萃して、重い事物を類推せしむるに用ゐる。「さへ」は「風さへ吹く」「あすさへ降らば若菜つみてむ」の如く、在るが上に添へ加へる意を表し、「のみ」「ばかり」は「ひとりのみ眺むるよりは」「今日はかりは曇れ」の如く、それ一つだけで、他にない意を示す。

(三) 接續的助詞

接續的助詞には「ば」「と・とも」「ど・ども」「に」「を」「が」「て」などが之に屬する。

「ば」は「待つとし聞かば今歸り來む」「寒くば内に在れ」の如く、用言の未然形、副詞形を受けて未然の條件を假想し、「春來れば花咲く」「命長ければ辱多し」の如く、用言の已然形を受けて、已然の條件を示し、共に順意の結果を起す。「と・とも」は「繪に書く」と筆も及ばし」「天氣好くとも行かじ」の如く、用言の未然形、副詞形を受けて、未然の條件を假想し、「ど・ども」は「春立てど花も匂はず」「位高けれども驕らず」の如く、用言の已然形を受けて、已然の條件を示し、共に下に逆意の結果を起す。「に」「を」「が」は「日照るに雨降る」「價高きを品も好からず」「屢々訪問せしが面會を得ず」の如く、用言の連體形を受けて、「ど・ども」の如き場合に用ゐる。但「上野へものせしに花は満開なりき」「三度登山せしが、いつも天氣は晴朗なりき」の如く、間々或事柄を言ひ終へて、それに關係ある他の事柄を言ふに用ゐる。

(四) 法を示す助詞

法を示す助辭には、「や」「か」「なむ」「ばや」「が・がも・がな」「や」「も」「な」「よ」「は」「かし」「か・かも・かな」「よ」「な」などが之に屬する。

「や」は「聲は聞ゆや」「障ることなしや」の如く、用言の終止形を受け、「か」は「はや起くるか」「此の川は深きか」の如く、用言の連體形を受けて、疑問を表す。「か」は「木が石か」の如く、體言にも付く。「や」「か」は「人や來る」「遅くや來つる」「風が寒き」「見る人なしに咲きか散るらむ」の如く、文の中に置いて疑問を表すことがある。此の場合には述語の用言を連體形で結ぶ。「や」「か」は共に疑問を表すけれども、上に疑の語があるときには、文の末にも中に「か」を置いて「や」を置かぬ。「いづくにあるか」「いかで知らむ」「や」「か」は又「古

今勇士の意氣甚だ似たらずや」「見てのみや人に語らむ」「かくてのみ止むべきものか」「何の恐るることかあるべき」の如く、反語を表すことがある。此の場合には「君にやは劣るべき」「いつかは雪の消ゆるときある」の如く、「は」を伴ふことが多い。

「ばや」「なむ」は動詞の未然形に付いて希求を表す。但「ばや」は「心あらむ人に見せばや」の如く我が動作に關する希望を表し、「なん」は他の動作に對する詆罵を表す。「が」「がも」「がな」は多くは「も」「し」「に」「て」「し」の下に用ゐる。「も」は拔萃的體辭であり、「に」「て」は時の用辭「ぬ」「つ」の連用形、「し」は「き」の連體形である。未然の事を過去に言做して願望を表すのである。「白露を消たすて玉にぬく物にもが」「常にもがもな」「人に知られで来るよしもがな」「甲斐がねをさやにも見しが」「深き山にも入りにしが」「神てふ神に問ひ見てしがな」

「や」は「面白の景色や」「あはれいと寒しや」の如く、文の末に付いて餘情を添へ、「近江のや鏡の山」の如く、中に付いて語調を整へ、「も」は「驚鳴くも」「辛くも我は老いにけるかな」の如く、文の末又は中に付いて餘情を添へ、「な」は「水をたまへな」「老いにけるよな」の如く、多くは文の末に付いて餘情を添へ、「よ」「は」は「我こそは天下第一の名僧よ」「再び春は物を思ふよ」「近き皇胤を尋ねば融等も待るは」「これ見よ、まことにおはしましたるは」の如く、主として文の末に付いて軽く抑へ、餘情を添へて呼びかけていふに用ゐる。又「かし」は「いとう覺えたりかし」「疾く行けかし」の如く、文の末に付いて押据多て餘情を表し、「か・かも・かな」は「白露を玉にもぬける春の柳か」「梅の花かと打見つるかも」「夜白浪の面白きかな」の如く、文の末に付いて感激の意を添へるに用ゐる。

「よ」は動詞の活用第六變化の條で述べた如く、四段活用、ラ行變格活用、ナ行變格活用外の動詞の命令形に付い

て命令を表し、「な」は「我を忘るな」「あやまちすな」の如く、動詞の終止形に付いて禁止を來す。「な」は「いたくな泣きそ」「吹きな散しそ」の如く、動詞の上又は熟合動詞の間に入れ、下に「そ」を据ゑることがある。此の場合には動詞の連用形を介むのが通則であるが、カ行變格活用、サ行變格活用ばかりは「なこそ」「なせそ」の如く未然形を介む。

× × × × × × ×

以上で單語論の大體を説明し終つた。進んでは文章論にはいるべきであるが、與へられた紙數を超えたので、これで筆を擱くことにする。